

女高師理科数学選修生が体験した戦争

—小宮山さなへの回想—

馬場幸栄・難波知子

お茶の水女子大学に現存する『水路部日誌』は、第二次世界大戦中に水路部によって動員された東京女子高等師範学校（女高師）理科の学生たちに関する重要な記録である。同日誌には、昭和20年3月から続いた空襲によって通学生の多くが焼け出され寄宿舎で生活するようになったことや、同年5月に寄宿舎も空襲で全焼したこと、それが原因で女高師生たちは水路部の作業ができなくなり、地方での農業動員に転じたことなどが記されている。

ただし、『水路部日誌』はもともと動員された女高師生の出欠状況を記録するために作成されていた事務書類であるため、そこには戦争に関する学生視点の情報はいっさい記されておらず、同日誌だけでは動員された女高師生たちの戦争体験について多くを知ることは困難であった。

しかし近年、水路部に動員されていた通学生のひとりである小宮山さなへ氏の回想メモが見つかった。それは、女高師理科数学選修を卒業した同氏が晩年に行った戦争に関する短い講演の原稿であった。4枚にわたるその手書き原稿には、昭和20年4月の空襲で都内の自宅から焼け出されたときの状況が克明に記録されている。また、小宮山氏の女高師生時代の写真も発見され、当時の学生たちの状況がより詳細にわかるようになった。

本発表では、『水路部日誌』の記録と小宮山氏の回想メモおよび写真を照合しながら、女高師が戦争において果たした役割や、それが当時の学生たちに与えた影響について考察する。